歴史学叢書別冊

王朝時代の陰陽

本書は94年前に30歳の若さで亡くなった齋藤勵氏の卒業論文であり、陰陽道に関する最初のまとまった著書である。初版刊行以来90年以上もたつ今日、なお古典的名著として、依然として参照されるべき価値をもっている。本書はまず奈良・平安時代の陰陽道の前提として、中国隋唐の陰陽五行説に至る起源発達を述べ、次いで陰陽道の日本への伝来・受容をはじめ、陰陽寮の制度とその職掌・教育、陰陽道をになった達人たち、天文道と天文占、暦道と暦占、その他の卜占方術、陰陽道における祭祓等々を詳述、さらに災異・祥瑞思想や改元問題に及ぶ。

●齋藤　勵著・水口幹記解説

名著刊行会

9784839003302

1923021028008

ISBN978-4-8390-0330-2

C3021 ¥2800E

定価（本体2800円＋税）

歴史学叢書別冊

漢土に於る陰陽五行説の起原発達
我国上古の思想界と陰陽道の伝来
陰陽寮の官制と其教育制度
其道の達人と伝播の一般と
天文道と天文占と
暦道と暦占と
陰陽道そのものと筮式方術
陰陽道に於る祭祓
災異と祥瑞と
年号の起原及改元の動機
『王朝時代の陰陽道』と陰陽道研究

王朝時代の陰陽道

齋藤　勵　著
水口幹記解説

歴史学叢書別冊

名著刊行会

水口幹記（みずぐち・もとき）

1970年東京都に生まれる。1993年早稲田大学第一文学部史学科卒業。2002年早稲田大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。2004年博士（文学）。2001年～03年早稲田大学第一文学部助手。2005年浙江工商大学日本語言文化学院特聘副教授、現在に至る。

〔著書〕

『日本古代漢籍受容の史的研究』（汲古書院）

王朝時代の陰陽道　　歴史学叢書別冊

2007年 6 月21日　第1版第1刷発行

著　者　　齋藤　勵

解　説　　水口幹記

発行者　　西澤泰義

発行所　　名著刊行会

東京都千代田区神田神保町2－20

ISBN978－4－8390－0330－2　C3021　熊谷印刷・三水舎

目　次

第一章　漢土に於る陰陽五行説の起原発達を述べて陰陽道の本体に及ぶ……1
第二章　我国上古の思想界と陰陽道の伝来……23
第三章　陰陽寮の官制と其教育制度……38
第四章　其道の達人と伝播の一般と……54
第五章　天文道と天文占と……69
第六章　暦道と暦占と　日時方位吉凶……93
第七章　陰陽道そのものと筮式方術……135

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第八章　陰陽道に於る祭祓……147
第九章　災異と祥瑞と……156
第十章　年号の起原及改元の動機をのべて
　　寧楽平安両朝思想の差異に及ぶ……165
『王朝時代の陰陽道』と陰陽道研究（水口幹記）……196
陰陽道関係文献目録（稿）（水口幹記）……251

第一章　漢土に於る陰陽五行説の起原発達を述べて陰陽道の本体に及ぶ

漢土上代の思想に於て、祖霊と昊天とは共に崇拝の対象たりき、陰陽と五行とは共に万有の元素たりき。前者は寧宗教的にして、儒教のよつて原づく所となり、後者は寧哲学的にして、陰陽五行説のよつて来る所となる。然れども宗教と哲学とは万有に対する驚愕不審の念よりする出発の起点と、人類に安心立命の地位を得しめむとする究竟の目的とに於て、相一致する所あるが故に、其間に明確なる分界線を劃すること極めて難く、従つて両者の交渉は、互に相流通混化して、其原始の形に遠かるに至るはあり得べきことゝす。斯の如くにして儒教は漸く哲学的分子を増し来り、斯の如くにして陰陽五行説は漸く宗教的分子を加へ来り、終には主客その位置を転倒するやうになりぬ。而して其全体の骨子の上よりして之を見れば、なほ共に其原始の性質を失

はざるなり。

漢土典籍の最古きものを、書、詩、易の三経となす。五行の思想は実に書経洪範に見はれ、陰陽の思想は実に周易繫辞に見はる。書経は上世帝王の遺書にして、洪範は殷箕子の伝述する所と伝へらる。天下国家を治むる所以の体系、之を五行、五事、八政、五紀、皇極、三徳、稽疑、庶徴、五福の九疇に分てり。五行とは即水火木金土の五にて、その配を万有に求め、その応を人事に徴し、もつて休咎を験するなり。周易は周文王周公卦辞爻辞を作り、孔丘十翼を製すと伝へらる。陰陽の爻を交錯し相重ね相序し、乾坤六子六十四卦三十二対をなす。即陰陽二気の往来変化により造化自然の法則を説明し、以て未来を測知せむとす。繫辞（上）に一陰一陽之謂道といふもの、実に全篇の眼目也。造化万有を或は五行に帰し、或は二気に帰す、共にこれ幼稚なる連想に本づく哲学観なりと雖、その天人の関係を信じ、卜筮の的確を信ずるに至りては、固よりこれ信仰のみ理論に非ざるなり、此点に於て是等の思想の中には、既に宗教的分子の包蔵せらるゝを見る。なほ孔丘が筆刪に係る春秋には、明に天変地異を直書して、陰陽五行の調和せざる意を寓す。これらの書は共に儒家の経典、孔丘は寔に

儒教の開祖たり、而して尚陰陽五行の分子を含む、豈これ当時時代思潮の反照ならずと謂はむや。世或は語孟中一語の陰陽五行に言及せられざるの故を以て、孔丘の十翼及春秋に於て毫も寓意なきを論ずる者あり。然れども此二書の本づく所は、共に陰陽五行の思想の既に萌芽せる後に於て出でたるものなり、孔丘も亦此時代に生れたる人也。先聖の作為せる周易に於て陰陽思想の種子を含み、孔丘の之を述べたるも怪しむに足らざる也。社会を描写せる春秋に於て五行思想の分子を包み、孔丘の之を棄てざりしも怪しむに足らざるなり。即陰陽五行は、孔丘の認めざりし所に非ず、然れども固より基本意に非ず、彼の重きを置く所は、周易にありては其道義にあり、春秋に於ては其尊崇周室にあるのみ、何ぞ独論語一篇をもつて彼が陰陽五行を認めざりし証左となすべけむや。周末春秋六国の際乱世の必要と割拠の勢とに応じ、所謂諸子百家の説雑然として起り、或は儒家となり、或は道家となり、或は墨家となり、或は法家となり、或は名家となり、或は縦横家となり、紛々擾々漢人が有せる古今の思想は、殆此間に於て発露し尽されぬ。而して陰陽五行の思想を純ら代表する陰陽家も、亦其間に介在せり、漢書芸文志諸子略に、陰陽家二十一家三百六十九篇を挙ぐるが中に、其

秦漢以前に係れりと覚ゆるものを摘記すれば

公梼生終始十四篇伝鄒奭始終書○中略
鄒子四十九篇名衍斉人、為燕昭王師○中略
乗丘子五篇六国時
黄帝泰素廿篇六国時韓諸公子○中略
鄒奭子十二篇斉人号雕龍奭○中略
馮促十三篇鄭人
周伯斉人六国時

公孫発二十二篇六国時
鄒子終始五十六篇師古曰亦鄒衍所説
杜文公五篇六国時師古曰劉向別録云韓人也
南公三十一篇六国時
閭丘子十三篇名快魏人在南公前
将鉅子五篇六国時先南公南公称之

蓋是等は、当時にありて斯道を以て一旗幟を立てしものならむ。然れども其書多くは今亡びて伝らねば、吾人はその内容の詳細を知るに由なし、唯儒教の経典たる書易春秋等に反映せる陰陽五行の思想を以て、所謂当時に陰陽五行説の一斑を想像するの外なきなり。

漢興りて秦の燔書坑儒の後を承け、学術復興の気運に向ふ。此時に方りて秦火黯澹の間に、まづ曙光を放ちしは道家と儒家となりき。然れども前代以来知識の光明を欠

きて、人心は皆迷信の黒幕をもて包まれぬ。神仙の説は道家の説と融合して行はれ、陰陽五行の説は儒家の説と結合して説かれき。賈誼、董仲舒、京房、劉向、劉歆の如き、共にこれ儒家なり、而も当時社会を風靡せる陰陽五行の思想渦中の人なるを免れず。賈誼の文帝六年建白して改革を議するや、一に曰く、改正朔、二に曰く、易服色黄色、三に曰く、定官名五数、四に曰く、興礼楽、五に曰く、色尚黄、六に曰く、数用五漢朝之を五行に配すれば土徳にて、色は黄、数は五に当れり主として五行説に本づく史記列伝。董仲舒の公羊春秋を修むるや、深く天人感応を信ず、其の春秋繁露には、五行、五行疑、陽高陰界、陰陽位、陰陽終始、陰陽出入、五行相生、五行相勝、五行順逆等の諸篇あり、其五常の説も亦五行説より出づるものゝ如し。京房に至つては、始めて易占と筮を以て一家をなし、亦天人の関係を説き、易伝隋書経籍志孟子京房、災異孟子京房、京氏段嘉漢書芸文志等の著あり。夏侯始昌は書経を以て教授し、陰陽に明也、霍光廃立の際夏侯勝の引いて卜知せる洪範五行伝は、蓋始昌の著ならむといふ廿二史劄記劉向に及んでは、洪範五行伝を著はし、穀梁春秋を修め符瑞災異を論ずる、其説詳密を極む。其子劉歆亦春秋の災異を五行に配して説明せり。人或は漢儒の陰陽五行説に傾くを以て、儒教の経典なる周易尚書春秋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

等を誣ふる附会の説となすものあれど、是等の経典にして、初より其種子を包含せるにあらずんば争で其論説爰に至るを得むや。漢代の学術復興が、漢儒の陰陽五行説によつて其序幕を開きしは注意すべきなり。知るべし、陰陽五行の説は、周末春秋を経て漸く迷信に傾きしが、秦火一炬百家諸子の学はその典籍と共に亡びなむとし、思想界の暗黒につれて迷信の風は愈〻深く当時の人心に浸潤しぬ。此時に方り、漢高天下を定め学芸によりて泰平を維持せむとし、思想界復活の気運に向ふや、幾多の儒者の儒教を唱道するに当りても、亦其経典中殊に当時の時代思潮に適合する部分をとりいで〻、之を布衍誇張するは、毫も恠しむに足らざる也。かくして陰陽五行説は、漢儒の手によりて一層その根柢を固めぬ。なほ漢書芸文志に劉歆が群書を総べて上れるものにより、目を立て〻六略とし、六芸九種百三家（易、書、詩、礼、楽、春秋、論語、孝経、小学）諸子十種百八十九家（儒、道、陰陽、法、名、墨、縱横、雑、農、小説）詩賦五種百六家（細目略ス）、兵家四種五十三家（兵形勢、陰陽、兵技巧）数術六種百九家（天文、暦、譜、五行、蓍亀、雑占、形法）方技四種三十六家（医経、経方、房中、神遷）等の書名を挙ぐるものを見るに、陰陽五行に関する著述は、諸子略なる陰陽二十一家はもとより、六芸略なる易十三家、書九家、春秋二十三家、諸子略なる儒五十三家、兵家略なる陰陽十六家、数術略なる

天文二十一家、歴譜十八家、五行三十一家、蓍亀十五家、雑占十八家、形法六家、其他にも多少之を認め得べし。以て陰陽五行の思想の、当時上下に瀰漫して至らざる隈なきを知るべき也。而して特に陰陽家五行家として標榜するもの、果して如何。

陰陽家者流、蓋出二於羲和之官一、敬順二昊天一歴二象日月星辰一、敬授二民時一此其所レ長也、及二拘者為レ之、則牽二於禁忌一泥二於小数一、舎二人事一而任二鬼神一（漢書。芸文志）

之によれば陰陽家は、もと堯舜の朝に占星暦象のことを掌りし羲和の官に出で、周代占星並に文書のことを掌りし太史の半面を継承して、拘忌に流れたるもの、史記太史公自序に、司馬談が六家（陰陽家儒家墨家名家法家及道家の六流）の長短を論ぜる語に、嘗窃観二陰陽之術一、大祥而衆忌諱、使二人拘而多レ所レ畏、然其序二四時之大順一不レ可レ失也といへるもよく合へり、既に漢代に於て、識者の間には其迷信的弊害を認むる者ありし也。又五行家については、漢書に、

五行者五常之刑気也、書云、初一曰二五行一、次二曰羞用二五事一、言進二用五事一以順二五行一也、貌言視聴思心失、而五行之序乱、五星之変作、皆出二於律歴之数一而分為レ一者也、其法亦起二五徳一、終始推二其極一、則無レ不レ至、而小数家因レ此以為二吉凶一、

而行二於世一寖以相乱芸文志

亦同じ欠点を有す、而して共に天文暦数と尠からざる関係を有し、共に占卜祈禳を事とする点に於て一致す。これ五行説の本づく洪範の水火木金土が、陰陽説の本づく周易の乾坤六子（風雷山沢水火）と、厳密の意味に於て矛盾せるに係らず混合化成せられ、陰陽五行とつゞけて称へらるゝに至りし所以にして、陰陽といひ、五行といひ、其所作より見れば、敢て分つべきものには非ざるなり。故に漢書五行の書目を挙ぐる中に、泰一陰陽、黄帝陰陽、黄帝諸子論陰陽、諸王子論陰陽、太元陰陽、三典陰陽談論、陰陽五行時令等の書名を見出し得べく、又五行志の記載も、陰陽説に本づく所少からず、なほ同じ五行の書目の中に、天文暦数占卜等に関係ある書名も見ゆめり（天文暦数占卜等については他に別に目を立てたるに係らす）其交渉の相通ぜしこと知るべし。故に広義には五行といふ名目の下に、陰陽、五行（狭義の）、天文暦数、占卜の凡てを包括せしめ得べく陰陽の名目についても、同様のことを云ひ得。わが朝に於て、陰陽寮の名称の下に天文暦陰陽等の分掌を置きしも、畢竟此意に外ならざるなり。

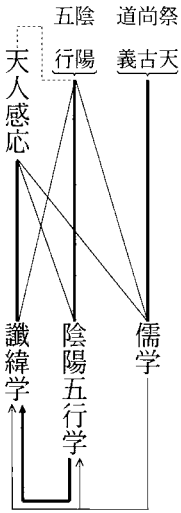
漢代迷信の風上下に行き渡るにつれて、天下を風靡せし陰陽五行の説は一転して讖

緯の説を生み出せり。讖緯とは図讖緯候の書にして、卜筮の流裔に出で鬼神に惑ふ者の説く所とす。四庫全書総目に、

儒者多称讖緯、其実讖自讖、緯自緯非一類也、讖者詭為隠語、預決吉凶、史記秦本紀称、盧生奏録図書之語、是其始也、緯者経之支流、衍及旁義、史記自序引易失之毫釐差以千里、漢書蓋寛饒伝、引易五帝官天下、三王家天下、注者均以為易緯之文、是也

とあり。もと讖と緯とは少しく其趣を異にせり、然るに其起原に於て天人感応説の分子を共有するより、後にはなべて讖緯と一つに称せらるゝに至りしこと、猶陰陽五行の一に称へらるゝに至りしと同じ趣ならむか。易繫辞に、河出レ図洛出レ書聖人則レ之といふ、書の顧命篇に、天球河図在東序といひ、論語子罕篇に、鳳鳥不レ至河不レ出レ図吾已矣夫といひ、彼の所謂河図洛書の符瑞は、実に讖の思想の起原をなすべき伝説なり。而して儒家の経典たる書易論語等に於てこれを認めたるも、陰陽五行説の儒教に於る関係と甚相似たり。緯に於ては殊に儒教との関係深きものあり緯書の名は漢書芸文志劉歆七略よりたるには未見えず、後漢書に至つて易緯六篇、書緯五篇、詩緯三篇、礼緯三

篇、楽緯三篇、春秋緯十二篇、孝経緯二篇（方術伝、英伝ノ註、樊）等あり。然れども漢儒の経書によつて天人感応を論ずるや、其説、後の緯書にいふ所と符合す。即知るべし、讖緯の思想は既に周代に淵源せしが、未一家をなすに至らず、漢代に及び同じ思想を包含せる儒家は、先陰陽五行説を生み、相藉り相助けて更に讖緯説を生むに至れる也。今試に是等の起原発達及相互の関係を図示せば大体左の如し。



要するに讖緯の説と陰陽五行の説とは、其因縁極めて深く、讖緯説は五行説の一派と見らるべきなり。其趣を異にせる顕著なる点の一は、前者の寧悲観的なるに反して、後者の寧楽観的なるにあり。吾人は此相異を以て、夫の灾異祥瑞に関する古人の観念の分るゝ所を説明せむと欲す。このことは後章に至つて更に述ぶる機あるべし。扨かゝる讖緯説の形体を備ふるに至りしは、漢末哀平の間にあり、王莽は之を利用して簒奪

の目的を達せり。光武の英明を以て尚且其渦中より脱すること能はざりき（後漢書廿二史割記少）くも彼が漢室を中興せるに当りて之を利用したるは争ふ可らず。かくて後漢となりて前漢の宗教的迷信思想の状態は依然として継続せり、讖緯の説はもとよりいふを俟たず五行の説も亦別に盛行せり。漢書の編者たる班固の如き、訓詁の泰斗たる鄭玄の如き、亦儒にして五行説に傾ける者なりき。而して後漢に於て其思潮界に波瀾を起し岩を削り岸を洗ふ一大潮流を現出せしめしものあり、印度仏教の渡来即是なり。仏教の厭世的思想はよく時代の大勢に投ぜり、仏教の宗教的分子は漢土固有の似非宗教に始めて生命を与へぬ、後漢の末内政の腐敗は群雄の割拠となり、五胡の侵人となり、天下紛々擾々乱麻の如く、漢末より六朝に亙りて厭世的思潮の滔々として流るゝ結果、社会は個人的となり神秘的となりしが、此潮流に乗じ此潮流を助けたるものは、実に仏教と道家となり。道家の説は春秋戦国の際老子より出でゝ虚静恬淡を主義とし、初より超世的風味を帯びたりしが、其末流に至っては神仙の説をさへ交へて著く宗教的となり、秦始皇前漢武帝の如き神仙を好み方士を信じたりしかば、其徒漸く蔓延し、儒教を以て国家の教本と定められし後も尚漢代に於る重なる宗教的勢力の一たるを失

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.